

瞬間の痕跡

写真学科

吉田 成

Imprint of a moment

Department of Photography

YOSHIDA Akira

2019年9月10日午後2時現在、私が生まれて62年と約7カ月半が経過した。これは、22,869日、548,847時間、32,030,820分、1,975,849,200秒に相当する。約20億秒だ。こうして改めて考えてみると、相当な長さといえよう。2018年3月に発行された『芸術世界』に掲載された作品《痕跡》に付けた拙文を書いた時には、生まれてから1,911,106,260秒の時だった。それから64,742,940秒が経過したことになる。この間、私は何をしてきたのだろうか。今、はっきりといえることは、その分だけ私が確実に死に近づいたということだ。死は何時訪れるかわからない。そして人は、「忍び寄る死」から逃れることができない。

私は近年、「写真はものの影であり、瞬間の痕跡にすぎないのではないか」と考えるようになった。このような考え方は間違っているかもしれない。写真には、もっとずっと大きな役割や意義があるようにも思う。しかし今の私には、ものの影と瞬間の痕跡、それがとても大事なことのよう思われる。ものの影と瞬間の痕跡とを手繰り寄せ、思考し、再構築する。膨大な時間と引き換えに、私はそのことの意味を考えているのかもしれない。

時間には、時計の針のように一定の速さで経過していくものと、それとは別のものがあると感じる。過去を振り返ると、長かったはずのその時間が何と短いことか。言い尽くされたことではあるが、それを実感した時、「生」というものに対して、別のものが見えてきたのだろう。光が偶然に創り出す画、その一つ一つを見逃さないようにしたいと思った。

付記：本作品は吉田成が撮影し、アトリエマツダイラがプリントした。













